

UICCについて



UICCは、がんコミュニティが連携して、世界のがん負担を軽減し、公平性拡大を促し、世界の医療・開発アジェンダにがん対策を組み入れることを目指して活動している

UICCは、会議を開催し、能力を高め、がんコミュニティが連携する構想を提唱するリーダーとしての役割に専念することによって、世界のがん負担を軽減し、公平性拡大を促し、世界の医療・開発アジェンダにがん対策を組み入れることを目指して活動しています。

UICCは、1933年に設立され、スイスのジュネーブを本拠とする、最も長い歴史と最大の規模を誇る国際がん対策機構です。162か国に1000を超えるメンバーと、56のパートナーを擁し、世界の主ながん学会、保健担当の官庁、治療研究機関、患者グループ、業界リーダーが関与しています。

UICCは長年にわたり、がん対策に関して独立した客観的な見解を表明する機関としての名声を得てきました。また、世界保健機関(WHO)や世界経済フォーラム(WEF)など、影響力の大きな組織において、がん対策が優先事項として取り扱われるように各国政府が対策を講じるよう促しています。

UICCは、国連経済社会理事会(ECOSOC)に有するステータスを活用し、国際がん研究機関(IARC)、国連薬物犯罪事務局

(UNODC)、国際原子力機関(IAEA)など、主な国連機関とも密接に連携しています。

UICCと傘下の多部門にわたるパートナーは、共通の価値創造の推進に尽力し、がんおよび非伝染性疾患(NCD)に関する世界疾病負担に対処する高品質で持続可能なプロ

グラムの実施・スケールアップを目指して力を尽くしています。

UICCは、現在約2000の組織と170か国で構成されるグローバルな市民社会ネットワーク、NCDアライアンスの創設メンバーです。



連携することによって、がん対策を成功に導きます

包摂的な連携の確立は、UICCが活動し影響力を発揮するための基盤です。だからこそ、がんとの闘いに大きな変化をもたらし、これを進歩させるために、さまざまな利害関係者と連携しています。

連携の相手方には、がん関連の組織、基金、民間企業が含まれ、これらの組織との間で共通の目標に基づく長期的な関係を確立しています。私たちは手を携えて何百万・何千万もの命を救うことを目指し、会議の開催・能力強化、支援という3つの優先分野を重視しています。



優先する活動分野



世界のリーダーを、革新的で広範ながん対策イベントや構想に結集させる。

私たちの最も重要な資産である会議と連携の能力を強化する:

- 世界のがんコミュニティの重要な会議の機会を活用し(世界対がんデー、世界がん会議、世界がんリーダーサミット)、これら各イベントの影響力を高める。
- 認知を拡大し、広がり最大化し、参加を促し、革新的な方法を開発し、開催したイベントですべての関係者が対話に参加できるようにする。
- 新たなメンバーやパートナーを私たちのファミリーに積極的に迎え入れ、彼らの考え方や見識がグローバルな舞台に届くようにする。
- 主な意思決定者を集めて、がん対策に関する最も緊急度の高いテーマに対処させ、地域のリーダーを結集させてネットワークを構築し課題に対処させる。
- 地域でワークショップを開催し、地域固有の問題に対処させる



能力を高めて地域のニーズに対応する

革新的なツールとスキルを開発し、組織がさらに良い仕事を行えるようにする:

- 地域のニーズに合わせて開発した持続可能な構想を推進し、公平性と影響力を高める。
- 国際的な特別奨学金、研修コース、マスタークラスを提供し、ニーズが最も高い分野を学ぶ機会を増やす。
- 組織管理、資金集め、連携、啓もう活動、患者支援の専門家を結集して相互学習を促進し、UICCメンバーの能力を高める。
- ツールキット、オンラインセミナー、オンライン学習、ガイドラインなど、オンラインとオフラインの両方を活用したポートフォリオを構築することによって技術革新をフルに生かし、グローバルに知識の共有化を図る。
- TNM悪性腫瘍分類、International Journal of Cancer、Global Journal of Oncologyを出版し、医療専門家の間で科学知識を今よりもさらに広める。



これまでに成功した支援活動を強化し、今後の改革を推進する

グローバルな取り組みを地域の活動につなげる:

- WHO NCD行動計画や持続可能な開発目標など、がんと非伝染性疾患に関するグローバルな取り組みを実行するよう各国に働きかけ、2018年度の国連NCD予防・対策見直しまでに、各国で進歩が見られるよう促す。
- 2005年世界保健総会でのがん対策の更新についての合意を促し、すべての政府ががん対策を公衆衛生の優先事項と再約束するようにする。
- 一連のがん治療を取り扱うがん対策構想に、国連機関を関与させる。
- UICCメンバーの見解が2018年度の国連の見直しおよび世界保健総会に反映されるようにする。
- がん対策および他のNCDに支出される国家の保健予算が拡大するようにし、がん負担に対処するのが最も困難な国に政府開発援助を最も大きな割合で割り当てるようにする。

出版物

- TNM: UICCは1953年に、Dr. Pierre Denoixがまとめた悪性腫瘍に関するTNM分類を採用した。現在、TNMはがんの病期に関する世界基準となっていて、Dr. Leslie SobinとProf. Mary Gospodarowiczが主導するTNM分類プロジェクトを通じて、UICCは定期的にこれを見直し、更新している。
- UICCはまた、がんの発見、診断、治療に関する簡潔で利用しやすい参照用ツール、臨床腫瘍学マニュアル(Manual of Clinical Oncology)を発行している。
- International Journal of Cancerは、UICCの公式刊行物で、実験的・臨床がん研究における一流の出版物である。世界中の疫学研究の発表の場として有名であり、腫瘍学関連の文献では他に類を見ない。



国際対がん連合(UICC)について

www.uicc.org

すべての人に治療を ——— 国の取り組みを活性化

連携して取り組むよう、グローバルな規模で要請

2018年には、新たにがんと診断された患者の数が1810万人に達しました。この水準が続けば、2040年には2940万人にまで増えると予想されます。この驚くべき数値が示唆するのは、がんは健康と発展に対するグローバルな脅威だとして、これに対処するための行動が明らかに緊急に要請されている今の状況です。がんが国民の健康と医療制度に及ぼす影響については、どの国も対策を講じ

てはいますが、がんの発症率・死亡率が最も急激に上昇しつつある低所得国(LMIC)にとって、これは最も大きな負担となっています。私たちは、この傾向を覆すための行動に、今すぐ乗り出さねばなりません。

総合的ながん予防・管理を改善するための国家による取り組みについての指針を各国政府に提供する2017度のがん決議が採択さ

れたのを受けて、UICCは、「すべての人に治療を」(Treatment for All)という構想を立ち上げました。この「すべての人に治療を」という構想は、UICCが提唱する重要なキャンペーンであり、対がんサービスへのアクセスについて世界に存在する格差に対処するよう、世界のがん対策コミュニティに向けて要請しています。これには以下の4つの柱を立てました。

公衆衛生に活用するがん関連データの質を向上させる

早期発見と正確ながん診断にアクセスできる人口を拡大する

早期疾患・転移性疾患に対する質の高い治療を、すべての人に、適時に提供する

少なくとも基本的な支持療法・緩和ケアを、すべての人が得られるようにする



2019 WCD ワールドキャンサーデー ライトアップイベント

UICCでは毎年、この2月4日の夜空をUICCカラーのブルーとオレンジの光に包むライトアップを世界各地で行います。UICC日本委員会では、カレッタ汐留の御協力のもと、ライトアップイベント「LIGHT UP THE WORLD」を開催しました。午後6時UICCカラーのブルーとオレンジのライトが点灯し、幻想的な世界となりました。今年は、喜劇女優の藤山直美さんらにきていただいて、がんに立ち向かう強い決意を語っていただき、多くの人々に勇気を届けていただきました。

2019年のワールドキャンサーデーからは、3年間続く新しいキャンペーンがスタートしています。今期のテーマは「I AM AND I WILL 私は今、そしてこれから私は」。人は誰でも、自分自身、愛する人、世界のひとびとのために、がんに立ち向かう力をもっています。このキャンペーンは、そのひとりひとりが、自分自身としてがんという病のためになにができるかを伝え合おうというキャンペーンです。UICC日本委員会ではワールドキャンサーデーのWEB<https://worldcancerday.jp/>を開設し、公式ハッシュタグの「#WorldCancerDay」「#IAmAndIWill」で投稿頂いたメッセージは、UICC本部WEBサイト内のソーシャルウォールに掲載されるようになっています。



- ゲスト（敬称略）
- 藤山 直美（喜劇女優）
服部 幸應（服部学園理事長）
西口 洋平（胆管がんサバイバー キャンサーベアレンツ代表）
小林咲里亜（小児がんサバイバー 柔道家）
佐々木昌弘（厚生労働省がん・疾病対策課長）
- UICC日本委員会メンバー
- 野田 哲生（UICC日本委員会委員長）
垣添 忠生（UICC日本委員会幹事/日本対がん協会会長）
赤座 英之（UICC-ARO Director/東京大学特任教授）
中釜 斉（UICC日本委員会幹事/国立がん研究センター理事長）
- 司会
- 河原ノリエ（UICC日本委員会広報委員長/東京大学特任講師）

世界とつながろう SNSキャンペーン

ワールドキャンサーデーでは、公式ハッシュタグをつくりました。

メッセージキャンペーンにご参加いただくことで、自分自身のメッセージを世界中の人へ発信ができ、つながることができます。皆さまのメッセージ1つ1つが、がんの影響を減らすための行動。ワールドキャンサーデーの活動サポートにつながるのです。是非あなたの「I AM AND I WILL（いま私は、そしてこれから私は）」メッセージをSNSにて発信してください。



メッセージを入力、または手書きのメッセージを写真や動画で撮る。ハッシュタグをつけて、写真や動画を投稿する。

※公式ハッシュタグをつけて投稿いただいたメッセージは、World Cancer Dayサイト内、<https://www.worldcancerday.org/>のSocial Wall（ソーシャルウォール）に自動的に掲載される予定でありますこと、予めご了承ください。

アジアがん官民対話フォーラム



アジアがん官民対話フォーラムとは、UICC-ARO主催により、国内の官民のマルチセクターがの代表者が集まり、アジアのがん医療におけるUHC実現にむけた取り組みについて話し合う場である。

第1回の議論を軸に、2018年7月に閣議決定された「アジア健康構想に向けた基本方針」の中に、「がんに関するデータベースの共有に向けたレジストリー制度のハーモナイゼーション等、疾病毎に包括的な検討を行う官民のプラットフォームの設置を検討」という提言内容が文言として盛り込まれている。議事内容は癌と化学療法誌にそれぞれ投稿論文として掲載されている。

（癌と化学療法2018年9月VOL.45、2019年4月VOL.46）



第1回（2018年4月23日）参加者リスト

武見 敬三（参議院議員）
安川 健司（アステラス製薬株式会社 代表取締役社長 CEO）
田村 憲久（衆議院議員、WHO議員連盟会長）
瀧口登志夫（キヤノンメディカルシステムズ株式会社 代表取締役社長）
今村 定臣（日本医師会 常任理事）
國土 典宏（国立国際医療研究センター 理事長）
中谷比呂樹（WHO（世界保健機構） 執行理事）
浅沼 一成（厚生労働省厚生科学課 課長）
北川 知行（UICC 日本委員会 名誉会員）
吉田 和弘（日本癌治療学会 理事）
田島 和雄（UICC 日本委員会 名誉会員）
赤名 正臣（エーザイ株式会社 執行役コーポレートアフェアーズ担当（兼）グローバルバリュー&アクセス担当）

中釜 斉（UICC 日本委員会、国立がん研究センター-日本癌学会 理事長）
佐々木昌弘（厚生労働省健康局 がん・疾病対策課 課長）
藤本 康二（内閣官房 健康・医療戦略室 次長）
野崎慎一郎（WHO 神戸センター 上級顧問官）
野野 圭志（中外製薬株式会社 上席執行役員）
小本曾麻里（世川平和財団ジェンダイノベーション事業グループ グループ長）
金井 要（JICA 人間開発部技術審議役）
椋村 春彦（浜松医科大学腫瘍病理学講座 教授）
佐藤 理恵（三菱商事株式会社 生活流通本部ヘルスケア部 病院ソリューションチーム）
増井 徹（慶應義塾大学 臨床遺伝学センター 教授）
平手 晴彦（共同座長/日本製薬工業協会国際委員長、武田薬品工業株式会社 コーポレートコミュニケーションズ&パブリックアフェアーズオフィサー）

野田 哲生（UICC 日本委員会委員長、がん研究会研究所 所長）
赤座 英之（座長/UICC-ARO Director、東京大学 特任教授）
河原ノリエ（UICC 日本委員会広報委員/UICC-ARO、東京大学 特任講師）

第2回（2018年9月5日）参加者リスト

武見 敬三（参議院議員）
安川 健司（アステラス製薬株式会社 代表取締役社長 CEO）
手代木 功（塩野義製薬株式会社 代表取締役社長 CEO）
平手 晴彦（武田薬品工業株式会社 コーポレートコミュニケーションズ&パブリックアフェアーズオフィサー）

佐藤 孝徳（武田薬品工業株式会社 パブリックアフェアーズ国際機関渉外ヘッド）
大野 好美（アステラス製薬株式会社 医療政策部CSR&グローバルヘルス・グループ 課長代理）

中谷比呂樹（世界保健機構（WHO） 執行理事）
佐々木昌弘（厚生労働省健康局 がん・疾病対策 課長）

藤本 康二（内閣官房 健康・医療戦略室 次長）
野崎慎一郎（WHO 神戸センター 上級顧問官）
野田 哲生（UICC 日本委員会委員長、がん研究会研究所 所長）
中釜 斉（UICC 日本委員会、国立がん研究センター-日本癌学会 理事長）
北川 雄光（UICC 日本委員会、慶應義塾大病院 病院長、日本癌学会 理事長）
赤座 英之（UICC 日本委員会、UICC-ARO Director、東京大学 特任教授）
河原ノリエ（UICC 日本委員会 広報委員会、東京大学 特任講師）



2020 WCD ワールドキャンサーデー

LIGHT UP THE WORLD

「ワールドキャンサーデー」は世界中の人々ががんのためにできることを考え、行動を起こす日として、2000年2月4日にパリで開催された「がん対策サミット」で誕生しました。

2020WCDは、20周年の節目となります。がん対策の進捗状況に焦点を当て、この20年を振り返るとともに、「I AM AND I WILL」というコアコンセプトに基づいて、想いをひとつにして日本が「がん」に立ち向かう決意を世界に発信します。

UICC会長ディナ・ミルアドヨルダン王女来日

UICC会長ディナ・ミルアドヨルダン王女が2018年11月に来日されました。

東京滞在中は、UICC日本委員会幹事との懇談、記念講演、また国会議員や企業経営者など多くの要人たちとの会談をなさいました。また多くのメディアの取材も受け、日本記者クラブの記者会見では、世界のがんの現状を語り、日本からの国際貢献の重要性を訴えられました。

日本記者クラブで記者会見



がん研での講演



根本匠厚生労働大臣を表敬訪問



日本委員会幹事会メンバーとの懇談



武見敬三参議院議員との懇談



西村康稔副官房長官と面談



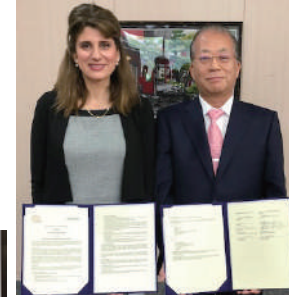
ワールドキャンサーデー ライトアップイベント

日 時：2020年2月4日(火)
18:00～(17:30開場)

会 場：カレッタ汐留 B2F
カレッタプラザ
イルミネーション会場
(〒105-7090 東京都港区東新橋1丁目8-2)

主 催：UICC日本委員会
協 力：カレッタ汐留

UICC-ARO



MOU締結



AAメンバーとの意見交換

UICC-AROはUICC本部との間に締結していた従来のMOUを、アジアでのUICC活動の更なる発展のために新しく締結しなされました。日本とアジアで共同イニシアチブを推進する機会を探ることや、他のステークホルダーと政策提言の策定に関与し、その結果をUICC本部に報告することなど、その内容は多岐におよんでいます。また今回、会長来日時に、C/Canプロジェクトのアジアでの展開の可能性などをAccess Acceleratedのメンバーを交え議論する機会を持ちました。

MOU：UICC-UICC-ARO



UICC日本委員会 TNM委員会の活動

UICCにとってTNM病期分類の維持と改訂は重要な活動の一つであり、日本におけるTNM活動はUICC日本委員会の内部組織として位置付けられている「TNM委員会」を中心に行っている。

近年の重要なトピックとしては、悪性腫瘍の病期分類に用いられる指標の1つとなるTNM分類が第7版から第8版に移行され、UICCは予定通り第8版のUICC規約を刊行し、2017年1月から運用を開始した。一方、AJCCもほぼ同内容のTNM第8版を刊行しているが、米国内の事情から第8版の運用開始を2018年1月に延期する措置が取られた。TNM委員会はTNM第8版の翻訳作業を行い、2017年12月15日に金原出版KKから出版された(右図)。

日本語版は英語版同様の体裁で、内容も英語版と対比できるようにページをそろえてある。

なお、英語版出版後、正誤表がUICCのウェブサイトで公開されたため、日本語版はそれを反映させたものとなっている。是非、皆様に広く利用されることを期待する。

UICC 本部 TNM 委員 浅村尚生（慶應義塾大病院）
UICC 日本委員会 TNM 委員長 佐野 武（がん研有明病院）



UICC 日本委員会

UICC 日本委員会とは

UICC日本委員会 Japan National Committee for UICC(UICC-Japan)は、UICCに加盟している日本の組織が集結し、世界対がん宣言の実現に努力するUICCを支援・連携して活動している日本の独立組織で、事務局を(公財)がん研究会に置いている。

日本の主要ながん専門学会、がんセンター、研究所、研究基金、病院、対がん協会などが参加している。

1966年
東京で開催された
UICC世界がん会議
(第9回)



UICC 日本委員会の活動内容

UICC本部と連携しながら 毎年2月4日のWorld Cancer Dayに各地でシンポジウムを、また日本癌学会や日本癌治療学会においてUICC Sessionなどを挙行している。

山際-吉田国際がん研究フェローシップの運用基金を会員組織と賛助会員の寄付で用意し、UICCに委託して運営している。この事業は1975年以来40年に亘り続けており、既に500人を超える世界の研究者が恩恵を受けており、日本の民間からの継続的貢献として評価されている。UICC-Asia Regional Office(ARO)に活動資金を提供し、その活動を支援している。

各種の委員会を設置し、世界対がん宣言に沿った活動企画し活動している。

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター
神奈川県立がんセンター
(公財)がん研究振興財団
国立がん研究センター
(公財)札幌がんセミナー
千葉県がんセンター
新潟県立がんセンター
(公財)日本対がん協会
(公社)日本婦人科腫瘍学会
三重大学医学部附属病院

(一社)アジアがんフォーラム
がん・感染症センター都立駒込病院
(公財)がん集学的治療研究財団
埼玉県立がんセンター
静岡県立静岡がんセンター
東京慈恵会医科大学
日本癌学会
(一社)日本乳癌学会
東札幌病院
宮城県がんセンター

大阪国際がんセンター
(公財)がん研究会
九州がんセンター
(公財)佐々木研究所
(公財)高松宮妃癌研究基金
栃木県立がんセンター
(一社)日本癌治療学会
(特非)日本肺癌学会
(公財)北海道対がん協会

【賛助会員】 協和発酵キリン株式会社(山極-吉田国際奨学金)
(公社)日本放射線腫瘍学会

UICC 日本委員会 2019年度役員

【委員長】 野田 哲生(がん研究会)

【幹事】

総務	中釜 斉(国立がん研究センター)
学術	垣添 忠生(日本対がん協会)
財務	吉田 和弘(岐阜大学大学院医学系研究科)
ARO担当	赤座 英之(東京大学大学院情報学環)
予防・疫学領域担当	浜島 信之(名古屋大学大学院医学系研究科)
事務局担当	大野 真司(がん研究会有明病院)

【監事】 増井 徹(国立精神・神経医療研究センター)
池田 徳彦(東京医科大学)

【専門委員会委員長】

疫学予防委員会	浜島 信之(名古屋大学大学院医学系研究科)
喫煙対策委員会	望月友美子(日本対がん協会)
患者支援委員会	北川 雄光(慶応大学医学部)
TNM委員会	佐野 武(がん研究会有明病院)
広報委員会	河原 ノリエ(東京大学大学院情報学環)
小児がん委員会	中川原 章(佐賀国際重粒子線がん治療財団)
対がん協会	坂野 康郎(日本対がん協会)

【UICC-AsiaRegionalOffice(ARO)】

赤座 英之(東京大学大学院情報学環)

【UICC 本部】

Fellowship 委員

中釜 斉(国立がん研究センター)

TNM 委員 浅村 尚生(慶応大学医学部)

【アジア・太平洋癌学会(APFOCC)】

赤座 英之(東京大学大学院情報学環)

【アジア・太平洋がん予防機構(APOCP)】

Malcolm A. Moore

【名誉会員】

杉村 隆(元国立がん研究センター、日本学士院)
井口 潔(元がん集学的治療研究財団)
青木 國男(元愛知県がんセンター)
富永 祐民(元愛知県がんセンター)
大島 明(元大阪府立成人病センター)
武藤徹一郎(がん研究会)
北川 知行(がん研究会)
田島 和雄(元愛知県がんセンター、三重大学)

【日本委員会事務局(がん研究会内)】

神田 浩明(研究・幹事会担当)(埼玉県立がんセンター)
関本 敏之(事務・委員長業務補佐)